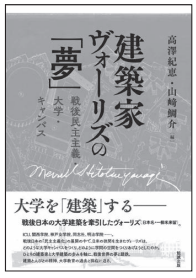
書評

高澤紀恵・山﨑鯛介 編
『建築家ヴォーリズの「夢」：戦後民主主義・大学・キャンパス』

Norie Takazawa, Taisuke Yamazaki,
“Kenchikuka vorizu no yume：
sengo minshu shugi・daigaku・kyanpasu”



勉誠出版/2019年１月/
A5判/316頁/
定価 4,500円＋税

香村 由佳
Yuka komura

はじめに

本書の内容は単に大学の歴史的建築物を分析し紹介するものではない。ミッション系建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズが設計した国際基督教大学（以下、ICU）キャンパスとその建築物を契機に、建築物の設計、キャンパス計画の経緯を明らかにし、大学創設の背景、思想、戦後の時代精神をも読み取り、現在の大学教育までを論じるものである。

本書は2016年のICUアジア文化研究所・平和研究所共催のシンポジウム「ヴォーリズの夢　平和と大学」での議論を元に、執筆者を加えて編纂された[1)]。文系、理系問わず様々な分野を専門とする執筆者による多角的な分析と、創立関係の記録、設計事務所に残された記録、そして建築家と大学とのやりとりの記録を駆使した論考は、単なる建築物保存論を超えて、社会と大学建築物、キャンパス空間との関係とその意義とは何かを問いかける。本書の問いは建築物に関する記録の価値を論じる上でも示唆に富むと考え、本書を取り上げる。

本書の構成

ヴォーリズと戦後の「夢」―序にかえて　高澤紀恵
執筆者一覧
図版出典一覧

1――ICUアジア文化研究所・平和研究所共催シンポジウム「ヴォーリズの夢　平和と大学」https://subsite.icu.ac.jp/iacs/symposium/s2013-2017/s20161029.html（2022.9.27最終確認）

第Ⅰ部　ヴォーリズとキャンパス　空間を読む
第１章　ミッション建築家ヴォーリズとICUのキャンパス計画　山形政昭
はじめに
（一）ヴォーリズの履歴と建築活動について
（二）建築活動とその特色
（三）ヴォーリズ建築事務所におけるミッション・スクールの建築
（四）キャンパス計画
（五）ICUの建築
第２章　日本で最初の学生会館　ディッフェンドルファー記念館の建設経緯
山﨑鯛介
はじめに
（一）マスタープランと教会堂に込められたヴォーリズの意図
（二）ディッフェンドルファーが求めた「現代の教会」
（三）「ディッフェンドルファー記念館」建設に至る経緯
（四）計画案の変遷
（五）竣工建物のデザイン
第３章　空間・時代・社会　ヴォーリズのいる場所　村上陽一郎
はじめに
（一）空間は歪んでいないか
（二）数学的空間と物理的空間
（三）デカルトの数学的空間
（四）コスモスの崩壊と空間の意味構造の中性化
（五）建物の場合
（六）平等という価値
（七）ヴォーリズの建築
第II部　大学と戦争　時代を読む
第４章　明日の大学　明日の都市　コミュニティとしての大学＝都市　吉見俊哉
はじめに
（一）中島飛行機三鷹研究所　軍都としての東京
（二）軍都から大学と公園の東京へ　ICUキャンパスの誕生
（三）もうひとつの大学都市構想　南原繁と上野・本郷・小石川文教地区
（四）リベラルアーツと都市コミュニティとしての大学
第５章　ヴォーリズの夢、そして大学の未来　ICU本館建替え問題の向こうに
田仲康博
（一）戦争の記憶と大学
（二）国際基督教大学の誕生

（三）占領と大学
（四）軍事占領下の琉球大学
（五）布令大学の誕生
（六）占領者の思惑
（七）「文化的発電機」としての琉球大学
（八）本館建替え問題が意味するもの
（九）大学の未来
第６章　冷戦と民主主義の蹉跌　現実と理想の狭間で　M・ウィリアム・スティール（岸佑　訳）
はじめに
（一）戦後の大学としてのICU　そのさまざまな声
（二）冷戦の産物としてのICU　キリスト教と共産主義
（三）結論
第７章　二〇世紀のリベラルアーツの歴史の中で　立川明
はじめに
（一）トインビーと一九一四年体験
（二）アメリカの教養教育と科学
（三）ネオ・ヒューマニズム
（四）第一次世界大戦と人文学の復権
（五）小規模カレッジの存続と学寮への回帰
（六）コロンビアとウィスコンシンでの教養教育プログラム
（七）シカゴ大学の試み
（八）戦後日本の大学改革と教養教育
（九）トインビーとICU
第Ⅲ部　ヴォーリズのことば
第８章　ヴォーリズの手紙　ある名建築家のコミュニケーション　樺島榮一郎
はじめに
（一）ヴォーリズの手紙概要
（二）距離を超える英語とタイプライター
（三）カウンターパートとしてのハロルド・W・ハケット
（四）ヴォーリズは建築設計という仕事をどう考えていたのか
（五）親切と親しみ
（六）アメリカとのつながり
（七）クレームへの対処
（八）ヴォーリズ、最後の手紙
（九）ヴォーリズの夢は実現したのか

第９章　記憶の宿る場所　稲冨昭がヴォーリズから引き継いだもの　岸佑
はじめに
（一）ヴォーリズ事務所に入るまで
（二）ヴォーリズ事務所の所員としてICUへ
（三）アメリカ留学
（四）ICU顧問建築家として
（五）記憶の宿る場所
（六）解題
あとがき　山﨑鯛介

各章の内容

ヴォーリズと戦後の「夢」―序にかえて　高澤紀恵

本書の編者高澤による、本書の議論の出発点となった2016年のシンポジウム、ウィリアム・メレル・ヴォーリズとICUとの関係、そして本書の目的と構成を紹介している章である。建築物が失われる前に、創立期に携わった人々のキャンパス計画への思い、大学にとってのヴォーリズ作品の意義を学問的に明らかにし、後世に伝える責任があると高澤は主張する。そして大学建築は公共財であり、キャンパス空間の変容は「知」がいかに生み出され、世代を超え、継承されるかという「本質的問いと不可分にかかわり、これを表象している」と指摘する。加えて、ICUのヴォーリズ建築を足がかりに大学創設プロセスを検討することが、「「戦後」の複雑な位相を理解する格好の素材たりうる」ことを提起している。

第1章　ミッション建築家ヴォーリズとICUのキャンパス計画　山形政昭

本章はヴォーリズ研究の第一人者である山形による。山形はまずヴォーリズの履歴を概観し、彼の建築活動がキリスト教団体「近江ミッション」の事業の中の一つであることを指摘する。そして彼の建築活動と設計の特色を、「種々の専門分野を持つ建築技師の協働による設計を目指し」ていること、「機能における合理性と穏健な表現を特色としたものだった」と評価する。次にミッション・スクール建築がヴォーリズの建築事務所にとって主要事業であったことを指摘する。山形はICU キャンパス計画がミッション建築家と言われたヴォーリズの、長年の学校建築に対する計画的思想によってもたらされた重要なプロジェクトであると共に、新しい建築を目指すヴォーリズ建築事務所の動きが結実したものであると主張する。

第2章　日本で最初の学生会館　ディッフェンドルファー記念館の建設経緯　山﨑鯛介

建築史家の山﨑は、ディッフェンドルファー記念館の建設経緯を、設計意図、受注者ヴォーリズと発注者側の中心人物ラルフ・E・ディッフェンドルファーの意図に着目しつ

つ明らかにする。山﨑は、ディッフェンドルファー記念館がキャンパス計画の中心であった教会堂の教会会館であったことを、学内に残されていた総合大学構想、実施計画のマスタープラン、大学とヴォーリズの往復書簡から指摘する。ディッフェンドルファーは大学自体が社会や都市の縮図として機能するための教会会館を期待し、1950年代には「学生会館」としてのイメージをも加えていった。その後、施設の利用主体となる全学生加入の「学生会」と、行政部、教員、学生三者を結ぶ学生教授連絡協議会が設立され、計画に参加したことで現在のディッフェンドルファー記念館の姿が誕生したことを、具体的に明らかにしている。

第3章　空間・時代・社会　ヴォーリズのいる場所　村上陽一郎

科学史家の村上は、古代ギリシアから現代に至るまでの空間理念の中にヴォーリズの建築を置き、彼の建築設計と、日本に残した功績を見出している。村上は「私たちが実際に経験する生活空間」が歪んでいることを歴史的に示した上で、日本においてヴォーリズが当初アマチュアの立場であったこと、彼の「最小限度の経費を以て、最高の満足を与え得る建築物を、人々に提供する」設計理念を紹介し、芸術的独自性を求める必然性がなかったのではないかと考察している。最後に、村上はヴォーリズが日本の近代化の歴史に対し果たした役割を評価するとともに、ポストモダン後の時代の空間理念の探索の必要性を問うている。

第4章　明日の大学　明日の都市　コミュニティとしての大学＝都市　吉見俊哉

都市論、文化社会学が専門の吉見は、草創期ICUと東京大学の、大学キャンパスと都市の関係に対する挑戦を通し、当時の両校の共通性を見出している。吉見は、ヴォーリズのキャンパス計画が大学を中核として、「三鷹から小金井にかけての地域全体を、文化的コミュニティとして発展させていく都市計画的な発想である」と評価し、この点が、南原繁総長の下での東京大学戦後構想に通じると指摘する。南原は英国の大学をモデルに、「思想においてのみならず、それと生活との統一が維持」される大学と市域の関係を構想し、戦前までの日本の帝国大学に決定的に欠けていたこととして、大学を全人的な人格形成の場とすることを目指した。吉見は、明治前期からの「帝国」理念に基づく帝国大学を「リベラルアーツ」理念に基づくものへ転換させることが、南原や後任の矢内原忠雄、そしてICUの湯浅八郎らキリスト教知識人らの共通の目標であったはずだと推測する。そしてこの大学知の転換は無数の都市的要素を入れ込んだ理想的な「明日の都市」コミュニティとして空間ごと転換させていくべきものであり、大学と都市は境界線を超越し共に進まなければならないという認識を、キリスト教徒であった彼らの方がより明確に持っていたのだと分析する。

第5章　ヴォーリズの夢、そして大学の未来　ICU本館建替え問題の向こうに　田仲康博

社会学、メディア論を専門とする田仲は、ICU本館ビル建て替えの議論を出発点に、平和と大学、大学と社会、学問の自由といった、現在の「知」の問題を本章で問う。田仲は占領下にあった日本において同時期に誕生したICUと琉球大学の草創期を比較し、両校が当時の国際政治による制約を受けたことを共通点として見出している。更に、ICU本館が戦後日本の歩みを記録・記憶する〈場〉として重要な意味を持つこと、日本の戦争に突き進んだ時代、敗戦後それを克服しようとした時代双方の記憶を留める場であると指摘する。最後に、本館建て替え問題は歴史や記憶を巡る立場、学生や社会にとっての大学の役割を問いかけていると指摘し、「学生や教員が自らを歴史の中に置き考えることを可能にする空間であること、そして広い意味でのコミュニケーションの〈場〉であること」に、大学の意義がかかっているのだと主張する。

第6章　冷戦と民主主義の蹉跌　現実と理想の狭間で　M・ウィリアム・スティール（岸佑　訳）

日本近現代史が専門のスティールは、ICUの草創期から開学後の、複雑で論争を伴う歴史の様相を、初代学長の湯浅八郎を軸としつつ明らかにしている。スティールはICU設立計画に関わった複数の異なる支援グループに焦点を当て、それぞれが新設の大学に抱いていた理想像、思惑を洗い出す。1945年以降の大学改革は経済的かつ政治的な現実に対応しなければならず、ICUを含め当時新たに作られた大学、再編された大学は「戦後の大学」であると共に「冷戦の大学」でもあった。だが、ICUにアメリカの民主主義と福音伝道主義が根付くことはなかった。1950年代を通じ、湯浅はリベラルな理想像、すなわちリベラルアーツ、「自ら思考する力」、国際主義、民主的シチズンシップ、普遍的人権とキリスト教的人道主義への大学の取り組みを強め、このことは1960年の日米安全保障条約の強行採決反対デモへの学生、教員の参加へと繋がったと分析している。

第7章　二〇世紀のリベラルアーツの歴史の中で　立川明

教育史家の立川は、ICU創設を20世紀前半のアメリカ合衆国での大学教育の変遷に置く。立川はヘレニズム研究家トインビーの体験を入り口として、世界大戦がアメリカ合衆国の知識層に与えた影響を検証する。20世紀前半の合衆国では科学と研究大学の興隆に抗して、人文学重視の教養教育と小規模カレッジとが生き残ったこと、1920年代と30年代に研究大学の代表校が実施したユニークな教養教育の試みについて、成功失敗にかかわらず紹介する。立川は、日本の大学が今後教養教育の改善を試みるのであれば、合衆国を経由し改造されたイギリスの大学教育方式の可能性を真剣に検討すべきだと主張する。最後に立川は、トインビーが創立期ICUと、東京大学で行った人文学のイデオロギー性に関する講演を紹介し、彼のトゥキュディデスを再発見し現代を深く反省した経験が、大学教育や学問研究に課題を突きつけ、その一端をICUも担い続けなくてはならないと結論づける。

第8章　ヴォーリズの手紙　ある名建築家のコミュニケーション　樺島榮一郎

本章はメディア産業論が専門の樺島による。樺島は建築家に求められる施主とのコミュニケーションに着目し、ヴォーリズとICUとの手紙のやり取りを分析している。樺島は、一粒社ヴォーリズ建築事務所東京事務所[2)]に残されていたICUに関する275点の手紙や資料と、ICU図書館に保管されていたICU財務担当副学長ハロルド・ハケットがヴォーリズ建築事務所とのやり取りをファイルしたもののうち、1954年から1956年のものを整理している。樺島は手紙や資料の内容を具体的に取り上げ、ヴォーリズの仕事観、人格、コミュニケーションの特徴を示している。ICUのプロジェクトは度重なる変更や工期の短縮、インフレや資金不足、複数主体とコミュニケーションを取らなくてはならないこと、ヴォーリズ自身や彼を支えた幹部社員の老齢化と、様々な困難があった。樺島は、残された手紙と、キャンパスの建築物を確認し、ヴォーリズが彼らしく誠実に仕事に取り組み、できる範囲で最良の建物を残したと評価している。

第9章　記憶の宿る場所　稲冨昭がヴォーリズから引き継いだもの　岸佑

日本近現代建築思想を専門とする岸による本章は、ヴォーリズ建築事務所所員としてICUキャンパスで現場監理に関わり、1964年から1978年までICUの顧問建築家を務めた建築家の稲冨昭へのインタビューで構成される。岸は、稲冨のヴォーリズやICUとの関わりを中心に、生い立ちから顧問建築家として立案したキャンパスプラン等について、広範にわたって聞き取りを行っている。稲冨がICUキャンパスプランに込めたのは、教育理念を空間に表すことであった。また寮、校舎、食堂、ロビーの椅子に至るまで対話による「学びの家」であるべきだとし、全人的な教育の場としてのキャンパスを理想としていたことがインタビューから窺える。岸は、稲冨の作品集の中でのICUキャンパスプランへの言及について触れ、稲冨の言葉を「記憶の宿る場所」であり、「人を育てる」空間としてのキャンパスだと解釈している。そうした空間を作るには理念が重要であり、その理念を達成するための教育プログラムと、それを実践する空間が大切だという稲冨の考えは、教育の場を形成する上で広く参考になると岸は主張している。

あとがき　山﨑鯛介

山﨑は、本書の主題を「現在のキャンパスと建築をどう読み解くか」といった建築的関心から、「何が彼らをそうさせたのか」といった思想的背景に視点を移し、その答えを多くの執筆者の論考から浮かび上がらせようと試みることである、とまとめる。山﨑は、ディッフェンドルファー記念館の設計プロセスから、実際の利用者（学生会）の意見を取り入れる柔軟な姿勢、既存の施設や景観を活かして全体を意味づけようとする手法を読み解き、ヴォーリズがそこにあるものを観察し、寄り添う民主主義的な建築家であると言及

2――本書p. 29注(5)に、一粒社ヴォーリズ建築事務所が、ヴォーリズ建築事務所の後継組織であることが示されている。

する。山﨑は、ディッフェンドルファー記念館が現在も学生や卒業生にとって心の拠り所となっており、ディッフェンドルファーとヴォーリズが描いた建学の理念を伝承するには絶好の場所であるとしている。

本書が示唆するものと、それに対する呼応

評者は本書が、大学のキャンパスと建築物が、大学の理念、時代背景、大学教育のあり方、関係する人々の精神を内包しているということ、そして大学の建築物を巡る議論が歴史学、教育学に発展し、大学と社会との関係性を分析する手がかりとなることを、各章全体を通じ示していることに着目したい。このことは、アーカイブズ学における建築物に関する記録に対する議論をも提起すると考える。背景には、現在のアーカイブズ学において、建築記録や「建築アーカイブズ」にまつわる議論が著名な建築設計者の作成した記録の整理、保存に関することを中心としている点が挙げられる。加えて、建築物を中心とした記録認識に関する研究や、建築物の竣工後に生み出される記録に着目した研究は少ない[3)]。

本書が議論を提起すると考える理由のひとつめは、本書の指摘する大学のキャンパスや建築物が内包する記憶とそこから生み出される公共的価値の継承は、建築物が内包する記憶自体を示す記録（本館草創期の記録や学生紛争など）の継承と切り離せない問題だと考えるためである。ふたつめに、本書が建築計画や建築物は発注者と受注者双方の意図や理念を多分に含むことを示していることが挙げられる。

ひとつめの理由について、第５章で田仲は、ICU本館を残すべき理由として、軍需産業の記憶を留める戦争遺跡であり、また「戦後日本の歩みを記録・記憶する〈場〉」であること、「建物は、建物自体として、大学に学び、そこから巣立っていく学生たちに記憶されるとともに、彼女／彼らを歴史の中に位置づける学びの空間としても存在理由がある」と述べている。「この国が総力を挙げて戦争に突き進んだ日々と、敗戦後それを克服しようと尽力した日々の双方の記憶をとどめる本館がすでに存在する以上、それをどう活かして未来につなげていけばいいのかという責任をわれわれ大学責任者は負っている」、「本館はもはや国際基督教大学だけの財産ではないということだ。記憶の風化が懸念される社会にあって、本館を保存し、学びの場として使い続けることは、近隣社会のみならず、日本社会全体に対しても強いメッセージを発することになるだろう」と主張している。田仲の指摘する大学建築の歴史的、社会的意義の重大性とその継承の問題は、アーカイブズ学と

3――日本アーカイブズ学会2022年度大会の自由論題研究発表会において、藤本貴子氏が「建築物に着目した近現代建築資料の記述方法について」という発表を行なっている。「【会告】日本アーカイブズ学会2022年度大会開催概要および参加登録について」http://www.jsas.info/?cat=5（2022.09.28 最終確認）また関連する研究として、2021年度日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門パネルディスカッション（2）において、森本祥子氏が「東京大学文書館の建築資料　施設建築関連文書と内田祥三資料を例に」と題し、東京大学で保存されている施設建築関連文書について保存先を見出し、アーカイブズ機関において個々の資料を論理的に探し出す方法について発表している。「研究集会　研究協議会・研究懇談会・パネルディスカッション」https://www.aij.or.jp/jpn/symposium/2021/syukai2021.pdf（2022.09.28最終確認）

も無関係ではないと考える。

吉見や田仲の指摘している、ICUキャンパスや本館が中島飛行機三鷹研究所の跡地であることや学生紛争については、ICUアーカイブズに当時の様子を伝える記録が残されている[4)]。キャンパス空間で起こった出来事の記録が確かに存在するからこそ、田仲の重要視する建築物の内包する記憶が認識できると共に、個々人を歴史的時間軸の中で認識できる学びの場として建築物が再定義されるのではないか。つまり、こうした記録と建築物は公共的価値を相互補完する関係にあると考えられないだろうか。しかし建築物の内包する記憶の証拠となるこのような記録自体は、建築物の来歴や設計内容などを示すものではないため、建築学的な評価の範疇から外れてしまう。一方、建築物を保管する組織全体の記録を扱い、そのコンテクストを保持するアーカイブズ学のアプローチはこの点を克服できる[5)]。

ふたつめの理由について、第２章で山﨑が使用した資料は、主に「国際基督教大学図書館歴史資料室所蔵のディッフェンドルファー記念館関係書類と、一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵のヴォーリズと国際基督教大学との往復書簡である」[6)]と述べている。このことから、受注者、発注者双方が作成した記録が残されていたからこそ、ディッフェンドルファー記念館の建設経緯を、利用者である学生会の関与も含め分析することができたと言える。本書の第１章と第９章では、山形と樺島はヴォーリズによる伝道報告誌、遺稿[7)]や書簡から人物像と建築活動の特色を描き、ICUキャンパス計画と本館、ディッフェンドルファー記念館を、ヴォーリズの建築活動や個人としての思想の中に捉えようと試みている。大学のキャンパス計画や建築物は、大学が実施しようとする教育理念やプログラムに依拠しているということが、第４章の吉見による大学と都市コミュニティとの関わりに関する論考、第７章での立川によるアメリカの大学の方針転換がキャンパスの変化を伴ったことへの指摘[8)]、第９章での岸による稲冨へのインタビューにおけるアカデミックプログラム

4―― 本書における中島飛行機時代の記述は高柳昌久氏の研究を元にしている。高柳氏は中島飛行機関係者や地主への聞き取り調査を行っている。本書p. 101, 120~121, 144. また、学生紛争に関してICUアーカイブズデータベースを検索すると、“student strike”というタイトルの資料や、学生紛争後のICUキャンパスの様子を伝える当時のgazetteを発見できる。たとえば以下を参照されたい。資料名「Student Strike- Spring. 1967」（資料No. D-07-04-048）、「Student Strike, History of（Spring 1967）」（資料No. D-D-03-055）、「ICU　GAZETTE - vol.09 no.01 - April 28, 1967」（資料No. D-G_J_1967.0428）など。「ICUアーカイブズ　データベース」https://opac.icu.ac.jp/repo/repository/ArchiveDatabase/（2022.12.20最終確認）

5―― 評者はアーカイブズ記述によって組織全体の記録を記述し、建築物に関する記録をその一部として位置付けることで、組織記録の文脈の中で建築物を捉えることが可能となると考える。アーカイブズ記述がもたらす成果について、Laura A. Millarは「（アーカイブズ）記述はアーカイブズの内容、コンテクスト、構造、アーキビストが資料群を保護するためにとった行動を明らかにし、その証拠としての価値を支え、利用を可能にする」（評者訳、括弧内は評者追記）と述べている。Laura A. Millar, *Archives: principles and practices*, 2nd ed, Facet publishing, 2017, p. 214.

6―― 本書p. 64 注(2)を参照。

7―― 本書p. 28 注(1)において山形が基礎的史料として挙げている。

8―― 本書p. 189.

の重要性の指摘[9]によって示されている。このことから、建築計画に伴って生み出される記録を、建築物に関わる組織が社会に向けて果たそうとする目的、理念すなわち社会的機能に着目し、組織記録の一部として認識することで、結果的に建築物自体をより広い枠組みの中に捉えることができるのではないだろうか。

このように、大学建築を題材に、その社会的意義や大学教育の役割、設立時の国際情勢等を論じる本書は、アーカイブズ学に対し、建築物に関する記録の認識、管理についての議論を投げかけていると考える。

9―― 本書p. 274.